



第70回宗議会（1962年）で演説する訓覇信雄宗務総長

が、その趣旨が、た運動であった。促され展開された。興の願いから出てきているのが、同朋会運動です。から、東本願寺というような、そんな一宗派の小さい問題ではないのです。訓覇信雄「死して生きた」といふ深い、異なる精神に促され展開された運動であった。が、その趣旨が、

同朋会運動というものは、いうならば、仏教のほんとうの精神を回復する運動であって、インドの大乗仏教運動に匹敵するものなので、同朋会運動といえれば大乗仏教運動なのですから、大谷派よりも大きいものであつて、歴史的な運動だと言わなければならぬのです。(中略) 釈尊や親鸞にそむいた現在の仏法をほんとうの仏教に回復していくという、歴史的に重大な働きを担っているのが同朋会運動です。そういう仏教復興の願いから出てきているのが同朋会運動ですから、東本願寺というような、そんな一宗派の小さい問題ではないのです。訓覇信雄「死して生きた」といふ深い、異なる精神に促され展開された運動であった。が、その趣旨が、



初めての本廟参拝。御影堂の大きさに先達の願いの大きさを感じさせられました。

▼一日参拝 10月10/6  
第15組 興隆寺 6名



開教百周年記念で参詣させていただきました。ほぼ全員が帰郷式を受し法名をいただいた感動を口々に話しておりました。

▼奉仕団 10月10/5〜26  
第16組 善行寺お持ち受け奉仕団 41名

### 宗祖親鸞聖人七百五十四御遠忌 お待ち受け総上山

放」であるとしている。今こそ、宗祖親鸞聖人の精神に立ち返り、共に教えを生きる真の共同体を顕現しようとする運動である。それは一宗一派のための運動ではなく、教団が「人類に捧げる教団」たらんとするものであり「同朋会運動」というのは、いうならば、仏教のほんとうの精神を回復する運動であって、インドの大乗仏教運動に匹敵するものなので、同朋会運動といえれば大乗仏教運動なのですから、大谷派よりも大きいものであつて、歴史的な運動だと言わなければならぬのです。(中略) 釈尊や親鸞にそむいた現在の仏法をほんとうの仏教に回復していくという、歴史的に重大な働きを担っているのが同朋会運動です。そういう仏教復興の願いから出てきているのが同朋会運動ですから、東本願寺というような、そんな一宗派の小さい問題ではないのです。訓覇信雄「死して生きた」といふ深い、異なる精神に促され展開された運動であった。が、その趣旨が、

同朋会運動は、宗憲上どこに根拠があるのか。教団挙げての同朋会運動ならば、法主(現門首)の教書が發布されてしかるべきではないか。『真宗同朋会』というなら会長がいてしかるべきではないか、それは法主がなるべきであり、さらに推進員制度は教師制度、僧俗の分限を混乱させるのではないか。このような、同朋会運動に対する批判や反対意見が出されたという。これが教団の在り方を、古い閉鎖的体制を破ろうとする動きと、旧態依然とする体制と二分化して行く事に成り、後に大きな「教団問題」となっていたのである。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」  
 教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

## 教化本部通信 【第51回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょ  
 を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えましょ

しんらんweb 検索

## 真宗同朋会運動50年に向けて

### その検証 歩み(一)

#### 真宗同朋会運動の発足 (I)

教化本部 古卿 誠幸

真宗同朋会運動50年に向けての、同朋会運動の「興り」「歩み」「展望と方向性」についての検証。今号から「歩み」として、真宗同朋会運動の発足とその願いについて尋ねていく。「点描」は、「教区定例法座」の最終回。1975(昭和50)年、特別審議会「教区定例拡充審議会」において協議された定例の課題。これらの流れも踏まえて今後の展開が模索されていく。

宗祖七百回御遠忌を無事勤め宮谷法含師は辞任し、宗議会満場一致で訓覇内局が成立した。翌1962(昭和37)年6月8日第70回宗議会総長演説において、同朋会形成促進の為、第1次5ヶ年計画が発表された。これが真宗同朋会運動の始まりである。同年7月真宗同朋会条例公布、「真宗タイムス」が『同朋新聞』と改称され、同8月、第1回寺族子弟高校生研修会が同朋会館(2泊3日)で行われている。この演説の中で、同朋会が生まなければならない必然性について「教団の近代的脱皮の必然性」と「教団内における歴史的必然性」が述べられている。

それは、敗戦(昭和20年)という大きな転換の中で、軍国主義から民主主義へ、家族主義から個人主義へと社会の大勢が大きく変わり、そして1960年代という時代状況を背景として「われわれの教団は従来ご存じのように農村を基盤とした、所謂『家の宗教』の形をとってきたのでありますが、近代工業化の急速なる進展に伴いまして、農村社会は急速に工業社会へと移行し、戦前の家族制度の法律的廃止から『家』は、最早崩壊の危機に立つておるのであります。『真宗』1962年7月」と、そもそも、江戸時代の宗門改めという、キリシタンに対しての仏教徒である証明制度、すなわち「寺請」に始まる家を媒介とする「家の宗教」から、時代に即した信仰運動の展開の必要性が提示されている。「宗教は個人の自覚の上に立つべき」で、どこまでも信心を媒介とするものであり、さらに「個人の自覚」とは「自我意識からの解